

講習会（平成 21 年 10 月 29 日）での質疑をベースに、予報業務許可事業者の業務に役立つ事項を Q&A という形でまとめました。

◆台風解析の技術

Q1：日本付近で温帯低気圧への変質が進むと、風の中心と気圧の中心とでは、一般的にどの程度ズレるのですか？

A：ズレを生じさせる要因は、温帯低気圧への変質過程のほか、台風が移動することによる風速場の非対称性、地形の影響など様々あり、個々の事例で、それらの影響が異なるため一概には言えません。

大事なことは、防災的視点から台風の軌跡を追うことを目的とする場合、局所的な観測要素だけに着目するのではなく、広い領域の気象変化も踏まえながら解析することです。

Q2：気象庁が気圧の解析に用いている手法（コンパス法）は、日本付近で台風の構造が崩れかけている（同心円ではなくなる）ような場合でも有効なのですか？

A：コンパス法は、台風中心近傍の気圧傾度が大きい（異なる）ところだけの観測ではなく、複数の観測値に基づく気圧プロファイルを作って円弧を描きながら作業することが基本で、世界的にも確立した気圧解析の手法の一つです。気圧プロファイルについて、例えば中心気圧の埋没状況を反映させるように直線だけでなく中心付近を平坦とする近似を行ったり、台風に対し象限別に作成するなど、台風構造の変化に合わせて常に見直しており、台風の等圧線が円形でなくても気圧中心の範囲を絞り込むという点で有効です。なお気象庁では、気圧の解析として、コンパス法以外にも地上天気図の等圧線解析を行うほか、MSM の客観解析も参考として利用しています。

Q3：気象庁における「上陸」と「通過」の使い分けを具体的に教えてください。

A：「上陸」とは、台風の気圧の中心が北海道、本州、四国、九州の海岸線に達した場合をいいます。小さい島や半島を横切って短時間でまた海上に出るような場合は「通過」として扱います。小さい島や半島の目安としては、概ね **25km** としています。

なお、短い時間で「通過」や「上陸」を繰り返すような場合は、そのつど情報を発表するのではなく、防災上の効果等を考慮して、状況に応じて情報を発表します。

Q4：台風の中心位置を点で表現するのは、気象学的に無理があるのではないですか？

A：台風の中心部の領域は、ある程度の広がりをもっています。一方、情報伝達を行う上では簡潔明快な表現手段を用いる必要があります。

気象学的観点からはその表現には限界があることを踏まえ、伝える側においては、中心位置に過度に着目するのではなく、台風の面的な広がりや防災的な留意点を解説していくことが必要です。

◆台風予報の技術

Q1：台風のアンサンブル予報は、台風の予報円だけでなく、様々な気象解説で活用できるのではないですか？

A：台風のアンサンブル予報は、台風の進路を予報する目的で行っている特別な数値予測資料です。その予想結果の利用には、高度の専門的な知識が必要なことや、台風予報作業の判断材料のひとつにすぎないことから、このままでは、皆さんの解説業務には適していないため、気象庁では予報円や暴風域に入る確率という形で発表していますので、そちらを活用した解説をお願いします。なお、台風の中心が予報円内に入る確率を 70%で実施していることについては忘れないでください。

◆台風情報

Q1：台風が温帯低気圧に変化しても、台風として情報発表される場合があるのですか？

A：現状では、一般の皆さんが受ける印象は、台風と温帯低気圧では大きく異なり、報道の扱いも違って、温帯低気圧になると扱いが小さくなる場合が多いようです。

台風から温帯低気圧への変化は、ある瞬間に突如起こるのではなく、徐々に変質が進んでいきますので、特に、日本付近でこうした過程で再発達が見込まれるような場合は、防災上の視点から、ぎりぎりまで台風として扱っているところです。

Q2：台風情報を解説する上での留意点は何ですか？

A：日本付近の台風は、教科書の模式図等で解説されているような典型的な構造をもった例はごく僅かです。台風の典型例や、台風の中心位置ばかりにこだわった解説をするのではなく、レーダーやアメダスなども活用しながら、台風情報や地元の気象台が発表する警報などの解説を優先してください。